

ハ會社財産ノ受託人ヨリ又一ハ會社ノ代表人タルヲ是レナリ

抑此二個ノ身分ヲ有スル所以ノモノハ元來會社ノ一旦解散シタルトキハ無形人タル會社ノ資格ハ已ニ消滅スルヲ以テ會社ノ財産ハ皆テ各社ノ共有物ト爲ル可キニ依リ社外人トノ關係及ヒ裁判所ノ管轄等モ全ク變シテ別異ノモノト爲ル可キナリ然レモ斯ノ如ク變更スルキハ手數ヲ煩ハシテ實際大ニ繁雜ニ渉ルノ恐レアルヲ以テ仮令會社ハ已ニ解散スルモ其結算中ハ尙ホ其事務上ニ付キ依然其資格ヲ保續シテ無形人ノ存在セルモノト爲セシヲ以テ裁判所ノ管轄モ變セス又社外人トノ關係モ敢テ以前ト異ニセス而シテ其結算人ハ會社ヲ代表シテ以テ其原被告ト爲

ルヲ得セシメタルナリ然リ而シテ結算人ハ其權限太ク汎シト雖モ到底代理人タルニ過キサルヲ以テ唯タ財産支配ノ權ヲ有スルノミニシテ之ヲ處置スルノ權ヲ有セサルナリ故ニ不動産ヲ賣拂ヒ或ハ之ヲ書入質トシ或ハ等訟ヲ和解シ又ハ裁斷人ヲ委任シテ之ヲ裁斷セシムル等ノ權ヲ有セサルナリ

前段ニ陳述スル如ク會社ハ一旦解散スルモ其結算ノ終結ニ至ルマテハ猶ホ無形人タル會社ノ存續スルニ付テ左ノ結果ヲ生セリ即チ

第一 會社債主ハ社員ノ私債主ニ先クテ會社ノ資本ヲ以テ其負債ヲ辨償セシムルノ權アリ

第二 會社ニ關スル訴訟ニ於テ結算人ハ會社ヲ代理シテ



訴旨ヲ陳述シ又ハ答辨ヲ爲スノ權アリ而シテ裁判所ノ管轄モ會社存立中ト敢テ異ナルコトナシ

第三 會社ハ尙ホ無形人ナルヲ以テ結算中ト雖日破産(身代限)宣告ヲ受クルコトアリ

第四 會社ノ不動産ハ尙ホ無形人ノ有ニシテ社員ノ有ニ歸セサルヲ以テ管テ之ヲ差入レタル社員ノ妻又ハ其社員ノ後見ヲ受クル幼者或ハ被禁治産者ノ爲メ法律上ノ書入質ノ目的物トナラサルナリ其他尙ホ一二條件アリト雖モ之ヲ以テ類推セハ其理ヲ窮ルニ足ラン故ニ茲ニ之ヲ畧ス

第十章 會社財産ノ分派

會社財産ノ分派ニ係ル規則ハ商法中ハ勿論民事會社ノ規則中ニモ別段其設クナキヲ以テ遺物分派ノ規則ヲ通シ

テ爰ニ適用ス可キナリ(民法第千八百七十二條)抑遺物分派ノ規則ヲ以テ會社財産ノ分派ニ付キ適用スル所以ハ他ナシ凡ソ會社ノ解散ハ會社タル無形人ノ死去シタルモノニシテ其會社ノ財産ハ一轉シテ各社員ノ共有物ト爲ル其理恰モ死者ノ財産ヲ各相続人ノ共有スルト同一一般ナルヲ以テナリ

夫レ遺物相續篇ノ規則ニ依レハ各社員ハ其已ニ結算ノ完了シタル後ハ互ニ其財産ヲ分派スルノ權アルヲ以テ強ヒテ之ヲ共有セサル可カラサルノ義務アラサルナリ良シヤ共有ノ約束ヲ爲スモ其期限ハ法律ヲ以テ五ヶ年以内ト限定セルカ故ニ若シ五ヶ年以上共有スルノ約束ヲ爲スモ其約束ハ五ヶ年ニ止テ以上ハ其効ナキモノトナセリ蓋シ財



産ノ共有ヲ五ヶ年以内ニ限制スル所以ハ或ハ不動産ノ改良  
 ナ妨テ且其運轉融通ヲ止ムルノ弊害アルヲ以テナリ且又  
 分派ノ効ハ第八百十三條ニ依ルニ其分派前ヨリ已ニ有ス  
 ル所ノ所有權ヲ公表スルモノニシテ分派ニ依テ新ニ之ヲ  
 得タルモノニ非スト斷定セリ更ニ此語ヲ變シテ云フキハ  
 財産分派ハ所有權ヲ移轉スルノ効アルモノニアラス唯々  
 既得ノ所有權ヲ更ニ公表スト云フニ過キサレ夫レ斯  
 ノ如ク分派ノ主義ハ新ニ所有權ヲ移轉セシムルニ非ラス  
 シテ唯々之ヲ公表スルモノト爲スキハ何レノ時ヨリ各社  
 員ハ其分派ニ依テ掌握セシ物件ノ所有者タリト看做ス可  
 キヤノ疑問ヲ挾ムニ至ラン此問題ニ付テハ學者ノ論理ニ  
 途ニ分立セリ

或ル論者ノ説ニ依レハ民事會社ト商事會社ノ別ナク都テ  
 其分派ニ依テ得可キ物件ノ所有者ヲ見認ルハ則チ會社設  
 立ノ日即チ社員始テ其財産ヲ共有シタル時ニ在リト是レ  
 會社タル無形人ニ屬スル所ノ財産ヲ誤認ノ各社員ノ共有  
 ナリト思爲シタル説ト云ハサル可ラサルナリ  
 又或ル論者ノ説ニ依レハ無形人タル商事會社ノ財産分派  
 ニ係ハリテ其分派者ノ所有權ハ會社解散ノ日ヨリ生ス可  
 シ如何トナレハ會社解散マテハ無形人タル會社一個ニテ  
 其財産ヲ所有スルモノニシテ決シテ社員間互ニ其財産ヲ  
 共有スルモノニ非サルナリ而シテ社員ノ始テ其財産ヲ共  
 有スルハ則チ會社解散ノ日ニ在ルヲ以テナリト此説ノ如  
 キハ輿論ノ已ニ歸スル所ニシテ前説ニ比スレハ更ニ正理



ニ適スルモノニ似タリ  
 夫レ斯ノ如ク兩説相分ル、所以ハ畢竟各相利益スル所アルヲ以テナリ然レモ其理由ハ自然明瞭ナルヲ以テ之ヲ此ニ説述セサルナリ其他尙ホ遺物分派ニ關スル諸規則ニシテ其性質ノ相矛盾セサルモノハ皆テ會社財産ノ分派ニモ通シテ之ヲ適用ス可シ今マ之ヲ一々叙述スルハ煩ニ堪ヘサルノミナラス其利益モ亦タ甚タ多カラサルヲ以テ之ヲ爰ニ贅セス  
 是ヨリハ直ニ進テ社員間ノ爭論ヲ審判スル裁判所ノ管轄及ヒ期滿得免ノヲ陳述セン

第十一章 裁判管轄

商法第五十一條ヨリ第六十三條ニ至ル數條ノ旨趣ニ從ヘ

ハ凡ソ社員間ニ起ル爭論ハ必ス先ツ判斷人ヲシテ之ヲ裁斷セシム可キナリ夫レ斯ノ如ク商事ニ付テ特別ノ規定ヲ設ケタル所以ハ何ソヤ蓋シ立法者ハ各社員ノ間其交情ノ親密ナル猶ホ彼ノ兄弟ノ怡々タルカ如ク敢テ問然ス可カラサルモノト看做シタルヲ以テ其社員ノ間ニ起ル爭論ハ可及的温和ノ手段ヲ以テ之ヲ處辨シ敢テ之ヲ公裁ニ附セサランヲ希望シタルナリ而シテ其裁斷人ハ素ヨリ一人ニシテ官吏ニ非サレハ寧ロ裁判役ヨリモ自カラ和解人ノ性質ヲ帶フルカ故其裁判ハ商事裁判所ノ裁判ニ比スルニ太ク迅速ニシテ且ツ費用ヲ減省スルノ益アルノミナラズ其所爲深切ナルヲ以テ却テ原被兩造チシテ眞箇其調停ニ感服セシムルニ足ル可シト思惟シタルナリ然ルニ多年



ノ經驗ヲ以テ其實際ノ事跡ヲ照スニ立法官ノ豫期ハ其功  
 ヲ奏セス反テ太タシキ弊害ヲ發見セリ其故ハ則チ爭論者  
 双方判斷人ノ判斷ニ服セサルモノ多クシテ常ニ控訴上告  
 ノ跡ヲ斷タス却テ注意ノ反對ニ出テ概テ訴訟ハ延滞シ從  
 テ入費ノ嵩ム等意表ノ結果ヲ見ルモノ是ナリ是ヲ以テ世  
 人ハ往々之ヲ厭惡シ漸ク此規定ヲ廢セント欲スルノ念慮  
 ヲ起シ爾后數年ヲ經テ千八百五十六年七月十七日ニ至リ  
 遂ニ一ノ布告ヲ發シテ商法第五十一條ヨリ第六十三條ニ  
 至ルノ數條ヲ廢シ猶且六百三十一條ヲ改正シ凡ソ商事會  
 社ノ一ニ關シテ起リタル社員間ノ爭論ハ都テ商事裁判所  
 ニ於テ之ヲ裁判ス可シト定メタリ是レ即チ現行ノ法律ナ

夫レ現行法律ハ斯ノ如ク判斷人ヲ撰任スルノ規定ヲ廢シ  
 マリト雖モ實際商事裁判所ハ特ニ判斷人ヲシテ原被告ノ  
 申立ヲ聽キ以テ其和解ノ成ル可キ目的アルモノハ之レガ  
 調停ヲ爲シ其成ラサルモノニ就テハ意見ヲ陳述セシムル  
 一ヲ得ルナリ但シ裁判官ハ其判斷人ノ意見ニ對シ必ス同  
 意ヲ表スルノ要ナキハ勿論ナリ而シテ社員モ亦タ特約ヲ  
 以テ社員間ノ爭論ヲ判斷人ノ裁斷ニ任ス可キ一ヲ約束シ  
 得ルハ猶ホ一般普通ノ訴訟人ト異同アラサルナリ然レモ豫  
 メ會社ノ創立證書ヲ以テ各社員ノ間ニ起ル爭訟ハ之ヲ原  
 被告若クハ裁判所ノ任スル判斷人ニ判定セシム以シト約  
 定シ置ク一ハ決シテ爲シ得可カラサル所ナリ如何トナレ  
 ハ凡ソ訴權ハ公安ニ基ツクモノナルヲ以テ妄リニ之ヲ抛



棄スルヲ得サレハナリ蓋シ既ニ起リタル爭論ニシテ其原由ヲ熟知シ然ル後チ之ヲ判斷人ニ委任スルハ原被告ノ意向ニ依ルモノニシテ敢テ是非ヲ加フルヲ要セスト雖其原由ヲ知ルニ由シナキ未發ノ爭論ヲ以テ豫メ之ヲ判斷人ニ委任スルノ約ヲ爲スハ恰モ是レ訴權ヲ拋棄スルト同一ニシテ公安ニ反對スルモノト云フ可キナリ是レ即チ訴訟法第千六條ノ設ケアル所以ナリ

### 第十二章 期滿免除

商法第六十四條ニハ社員ノ爲メ特ニ定メタル五年ノ期滿免除ノ規定ヲ掲載セリ其文ニ曰ク「結算人ニアラサル社員及ヒ其社員ノ寡婦又ハ其相續人若クハ其代權人ニ對シテ爲ス可キ總テノ訴訟ハ會社存立期限ノ終リタル日又ハ解

散ノ時ヨリ起算シテ五ヶ年ヲ經過シタル後ハ期滿免除ヲル可シ云々夫レ斯ノ如ク社員ノ爲メ特ニ短期ノ期滿免除ヲ設ケタルハ畢竟合名會社及ヒ差金會社ノ社員ノ負フ可キ連帶義務ヲ寬恕スルガ爲メナリ蓋シ會社解散ノ後ハ會社ト社員トノ關係已ニ解ケテ其情日ニ相遠ク從テ訴件ニ對シ必要ナル證據ヲ立ツルノ便ヲ失ナヒ答辨ヲ爲ス能ハサルヲ以テ會社ノ負フタル夥多ノ義務ニ就キ定限ナク他人ノ訴ヲ被ルハ殆ト社員ノ堪ユル所ニ非サレハナリ而シテ今マ該條ノ主義ヲ探究スレハ即チ左ノ三義ヲ生スルナリ

第一此期滿免除ハ社員ニ對スル社外人ノ訴權ニノミ適用スヘキモノニシテ社員相互ノ間ニハ決シテ之ヲ適用ス可



キモノニ非サルナリ故ニ存立期限ヲ定メタル會社契約及  
 ヒ會社解散ノ證書ヲ廣告シタルニ非サレハ社員ハ此期滿  
 免除ノ利益ヲ受クルヲ得サルナリ

第二此期滿免除ハ會社解散ノ後ニ至リ始テ之ヲ適用スル  
 ヲ得ルモノナリ故ニ會社存立中ニ在テ社員ニ對スル社  
 外人ノ訴權ハ都テ普通法ノ期滿免除(三十年又ハ十年)ニ從  
 フモノトス

第三此期滿免除ノ五年ノ期限ハ會社ノ存立期限ヲ定メタ  
 ルキハ其存立期限ノ最終ノ日ヨリ又會社解散ノキハ其解  
 散ノ證書ヲ廣告シタル日ヨリ起算スルモノニシテ而シテ  
 社員其義務ヲ免カル、最長ノ期限ナリトス故ニ此期限ヲ  
 經過シタル後ニ於テハ會社義務ニ付キ仮令如何ナル訴訟

事件ノ起ルアルモ社員ハ期滿免除ヲ主張スルヲ得ルハ  
 勿論尙ホ且ツ此期限ヲ經過セサルノ前ニ在テモ其已ニ滿  
 期ニ至リシ期滿免除ハ亦タ之ヲ主張スルヲ得可キナリ  
 之ヲ例スルニ會社解散ノ時ニ當リ會社ハ既已ニ二十八年  
 前ヨリ他人ニ對シ義務ヲ負フタル如キハ會社解散ノ後僅  
 ニ二ケ年ヲ經過スレハ則チ三十年ノ期滿ツルヲ以テ普通  
 ノ期滿免除ニ因リ其義務ヲ免カル、ヲ得ルナリ  
 上來陳述シタル如ク此期滿免除ハ素ヨリ特別ナル法規ナ  
 リト雖モ其經過ヲ中斷シ或ハ之ヲ停止スルノ方法ニ至テ  
 ハ普通ノ期滿免除ノ規則ト敢テ異ナルナシ故ニ此期滿免  
 除モ出訴又ハ義務者ノ自認ニ依リ中斷スルヲ得可キモ  
 ノトス又法文中此期滿免除ヲ停止スルノ明文ナシト雖モ



固ヨリ契約執行ノ期限又ハ未必ノ條件等ニ依テ之ヲ停止  
スルヲ得可キナリ然レモ幼者又ハ被禁治産者ノ故ヲ以  
テ之ヲ停止スルヲ得ス蓋シ斯ノ如キ五年以下ノ短少ナ  
ル期滿免除ハ普通法ニ於テモ幼者又ハ被禁治産者ニ對シ  
其期限ノ經過ヲ停止スルヲ得キナリ

商事會社法終

明治廿年三月廿四日 版權免許  
全年全月廿八日 出版

〔正價金五拾錢〕

講述兼

出版人

鳥取縣士族

岸本辰雄

神田區中猿樂町廿貳番地

出版元

明治法律學校

神田區南甲賀町十一番地

發賣所

明法堂



神田區美土代町四丁目五番地



各府縣賣捌所

東京々橋區彌左衛門町十五番地

同 銀座四丁目

同 彌左衛門町十五番地

同 三十間堀二丁目

同 神田區淡路町一丁目

同 日本橋區西河岸町

大坂府備後町四丁目三番地

廣嶋縣廣嶋大手町二丁目

高知縣高知種崎町

石川縣金澤尾張町八十四番地

宮城縣仙臺國分町四丁目

同 大町四丁目

知新社

博文社

時習社

泰山書房

巖々堂

須原鐵二

岡嶋支店

早速社

澤本駒吉

雲根堂

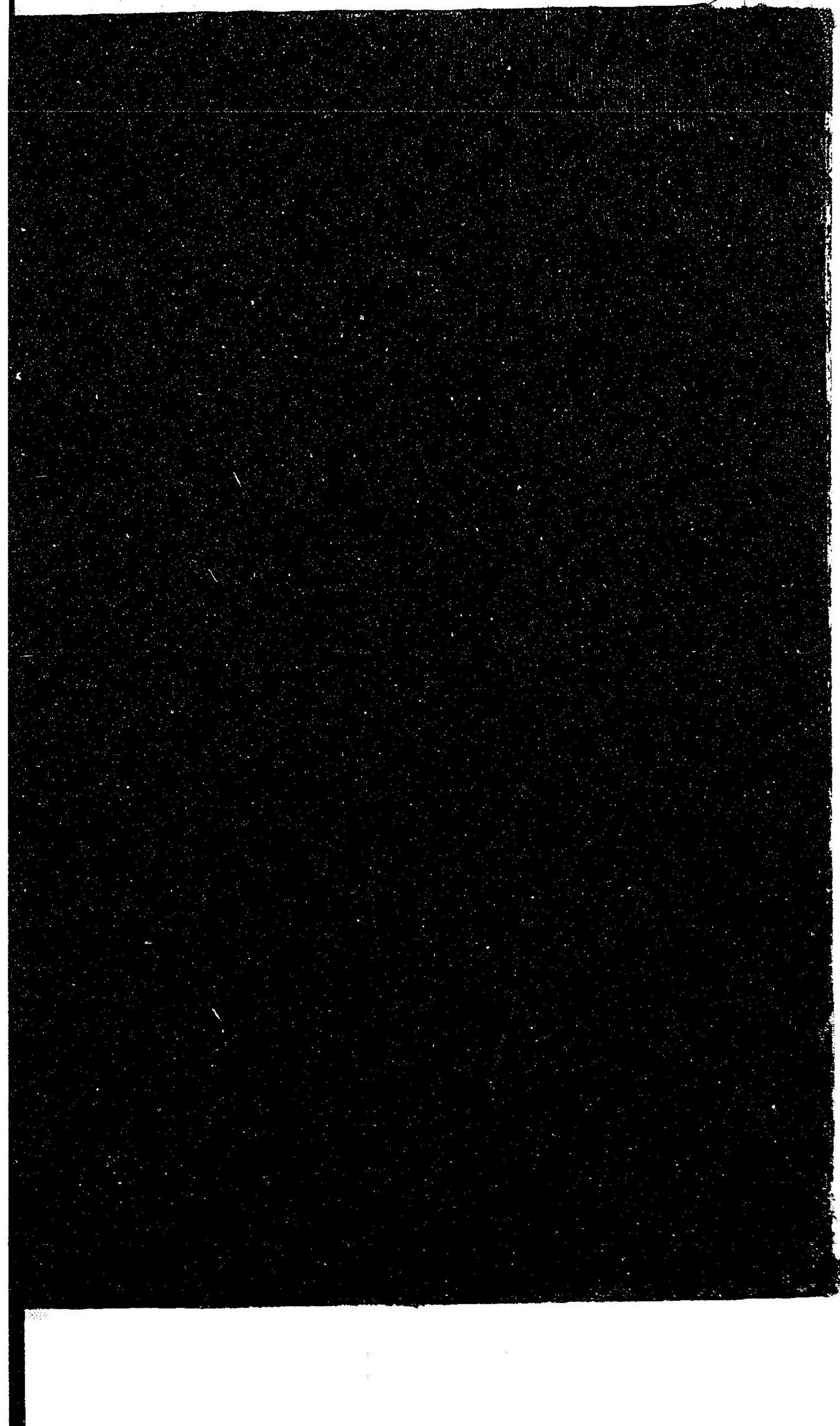
伊勢安

木村文助



26  
92









035408-000-4

26-92

仏国商事会社法講義

岸本 辰雄 / 著

M20

BBO-0593

